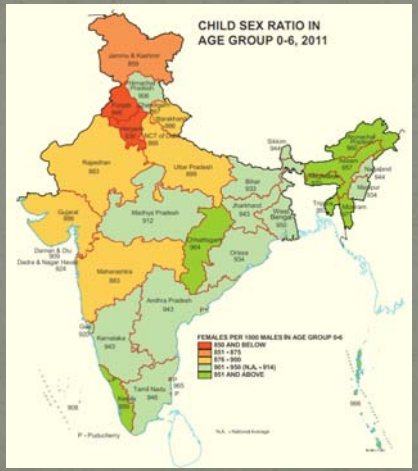
インドの「失われた」少女たち

スワプナ・マジュムダール

インドの「失われた」少女たち

- このおそろしい統計について考えてほしい。
  先頃公表された2011年度の国勢調査報告書によると、インドにおける0～6歳児の男女比率は、男子1,000人に対して女子がわずか919人だった。
- 10年前に行なわれた同一年齢層の比率は、男子1,000人に対して女子953人であった。
- これは、2011年におけるこの年齢層の子供は合計1億5,880万人で、2001年より500万人少ないということを意味している。
- そして減少分は、すべて女子である。

インドの児童性比マップ



なぜインドの少女たちが減少しているのか

- インドの人口は、中国に次いで世界第2位である。専門家によると、現在の人口増加率が続けば、すぐに中国を追い抜くということだ。
- そのため政府は、人口を安定させる必要があり、家族計画がその答だと考えた。
- 名案だが、実現したのだろうか。女性たちは、家族計画を選択でき、避妊具を手に入れることができたのだろうか。

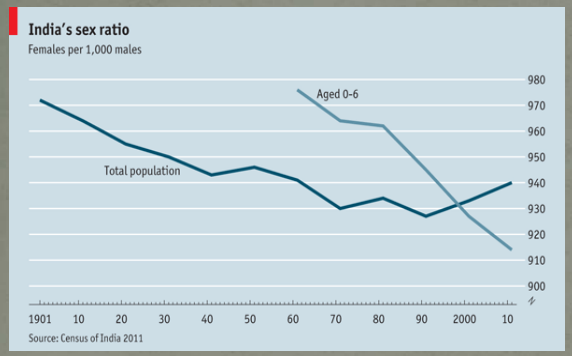
男子選好が女子を追い出す

- 女性が自分の身体を管理できない国で出生率を低下させるためには、女性たちを不妊手術の対象にする方が簡単だと政府は考えた。
- インドは、人口を安定させる家族計画の主要方法として女性の不妊手術に頼ってきた。州政府は、家族計画のための国家人口政策に規定されている「ターゲットフリー」の手法ではなく「ターゲットアプローチ」に従っており、女性の不妊化はそうしたターゲット（目標）を達成するための最善の方法と見なされている。
- 全世界の不妊手術済み女性2億2,500万人のうち約40%がインドに居住しており、女性たちは、どのように家族計画を行なうかを決定する権利を奪われている。

男子選好が女子を追い出す

- ほかにも望ましくない結果が生まれている。ノーベル賞を受賞したアマルティア・センは、急速な不妊化によって子供の性比が不均衡になり、男子選好が非常に強い等の理由から、そうした出生率の急速な低下によって女子が減少すると指摘していた。
- つまり男児を生まなければならないという圧力が非常に強いため、女児は胎児の段階で中絶されているのである。男児出産後、女性たちは卵管を切除するよう説得される。

少女の減少は、女性の減少を意味する



強制的な二人っ子政策

- 女子の数が減少したもう1つの理由は、二人っ子政策である。
- 子供が3人以上いる人々が農村の地方自治体に就職することを禁じるという方法でインドの人口増加を抑制するため、1992年の地方選挙の際にインドで導入された。
- オディシャ、アンドゥラ・プラデシュ、ビハール、グジャラート、マハラシュトラ、ラジャスタン等、インドの多くの州では、まだこの政策が遵守されている。

強制的な二人っ子政策

- インドでは男子選好が強いため、法律で子供を2人に制限すると女児の胎児が出産前に中絶されるようになり、女性に対する暴力や性比の低下をもたらす。
- それでは、二人っ子政策は、人口安定化プロセスを加速させるために必要なのだろうか。
- 二人っ子政策が出生率の低下につながったことを示す証拠はない。それどころか、この政策が女性の生殖権（リプロダクティブライツ）、人権、政治的権利を侵害したことを示す証拠が存在している。
- そうした侵害の証拠の1つは、子供が2人いる女性にだけ報奨を提示しているということである。

強制的な二人っ子政策は、女性の権利を侵害している

女性の権利の侵害

- 女性たちに不妊手術を勧めるため、金銭や自動車、テレビ、冷蔵庫、調理用コンロ等の報奨物が提供されている。これは女性に計り知れない影響を与え、女児胎児の中絶につながる出産前性別判定試験の増加を招いた。
- 女権および人権団体が声を上げた後、インド政府は受胎前・出生前診断技術（PCPNDT）法を可決し、1994年には女児胎児の選別的中絶が禁止された。しかし国内での児童性比の低下は、法律の制定から20年を経たにも関わらず、実施の遅れのために依然として女児の出生が妨げられていることを示している。

勇敢な妊婦たちはじっとしていない

- しかしすべてが失われたわけではない。非政府組織によって開始されたいくつかの介入が、希望をもたらしつつある。
- そうした優れたイニシアティブの1つが、西インドのラジャスタン州で実施されている。そこでは女性たちは、自分の身体を管理する権利、とりわけ生まれてくる権利を非常に長い間待っていた。
- ラジャスタンでも国内のその他の州と同様に男子選好の傾向が強く、女児胎児の選別的中絶によってこの権利が否定され、子供の性比（CSR）が低下していた。

勇敢な妊婦たちが道を示す

- ラジャスタンのCSRは2001年の946から2011年の888へと低下したが、女性たちはもはやじっとしていない。法律に違反している医師たちを罰するため、診断センターに関して州政府が実施する抜き打ち検査に妊婦たちが自発的に、多くの場合、家族の反対を押し切って参加している。
- これまでに21回の抜き打ち検査が実施され、185人の妊婦が協力した。2011年以降、その勢いは増しており、ラジャスタンの州都ジャイプールでは、2013年の半年間に9回のおとり捜査が行なわれた。

女性にとっての大きな成果

- 女性の姿や声がめったに表に出ることのない州にとって、これは大きな成果である。
- かつては捜査活動への参加というリスクを負う意志のある妊婦を見つけることが最大の障害であった。証拠の欠如や敵意ある証人たちのために、性別判定試験に関する技術を濫用した医師たちは、PCPNDT法に基づく罰則措置から逃れてきた。
- 公式の数字によると、PCPNDT法に基づいて2,149件の事件が起訴され、562件が裁判にかけられている。

努力が実を結ぶ

- ラジャスタン州全域で超音波装置の製造会社と供給会社23社が、法律に基づく機械の販売登録を行なわなかったという理由で処罰された。
- PCPNDT法に基づいて起訴された事件の追跡を担当する警察署が、国内で初めて指定された。
- 国家農村保健計画によってまとめられた2012年と2013年の生児出生データは、女児出生数の増加を示している。

女性たちが真の英雄である

- しかしこれらの数字の背後にいる真の英雄は、妊婦ボランティアの人々である。
- 家族、特に義母と夫を説得しなければならないのは、女性たちである。胎児の生命が危険にさらされるという女性たちの家族の恐れが現実のものになりかけたことは、何度もある。しかし意欲に燃える女性たちは、頑張り通してきた。
- ジャイプール地区に住むアーシャ・シンは、捜査チームが交通渋滞のために遅れたため、女児胎児の選別的中絶のために運び込まれそうになったが、最初の子供を妊娠した時におとりとなることを認めてくれるよう、義母を説得したことを後悔していない。捜査チームが到着するまでバスルームに閉じこもらなければならないという心臓が止まりそうな経験を克服したシンは、裁判で審理が行なわれた時には、女児を守り、養護施設が永久に閉鎖され続けるようにするため、どこまでも闘うという覚悟を固めている。

女性たちがおとり捜査の先頭に立つ

- これまでに州のPCPNDT部門と共同で21件のおとり捜査のうち17件を実施した地方非政府組織、Shikshit Rozgar Kendra Prabandhak Samiti （SRKPS）は、妊婦とその家族が男子の跡継ぎの出産を求める圧力に屈しないよう激励し、動機付けるため、何年も大変な努力を行なってきた。
- SRKPSはプラン・インディアと共同でターゲットを絞った介入を行い、女児の価値に対する意識を高めるため、25,000人を超える人々と交流した。

女児胎児の選別的中絶を拒否

- ジュンフヌ地区ドゥラナ村の住民で、訓練を受けた補助看護助産婦であるスニタ・シャルマが参加したのは、啓蒙活動がきっかけだった。スニタは第3子を妊娠した時、性別判定試験を受けるよう勧める母親の圧力に耐え、3女を生んだ。現在は、SRKPSの長であるラジャン・チョーダリーによる訓練を受けた11人の女性おとり捜査コーディネーターの1人として、自身の経験を活かし、妊婦たちが大義に協力してくれるよう働きかけている。
- ラジャスタンのCSRには依然として男子選好の傾向が見られるが、妊婦ボランティアたちの勇気によって女児の出生数は増加しつつある。